日本SOD研究会報

特集

丹羽療法治療レポート

初期のがんこそ丹羽療法

治療法の見極めは医者にもできない

発行元 日本ＳＯＤ研究会 宮城
住　所 〒158-0094
東京都世田谷区
玉川 1-15-2 Ｂ棟 2802
TEL. 03-5787-3498
協力：株式会社丹羽メディカル研究所
http://www.niwa-medical.com

今回の丹羽先生へのインタビューは、今さらながらですが、がん治療の選択について、お話しを伺ってきました。先生の著書『がん治療「究極の選択」抗がん剤を超えた丹羽療法』（講談社新書）の中にも

「がんの宣告を受けたとき、患者さんやそのご家族は、西洋医学から民間療法まで様々な医療法がある中、どの治療を選ぶか、限られた時間の中で厳しい選択を迫られます。

がんを宣告された患者さんが、西洋医学の抗がん剤の副作用で苦しんで死ぬのはいやだといって、漢方、健康食品、温泉療法、気功、鍼灸などの代替療法を受けたいと思っても、これらの自然回帰の治療法は、副作用はないが効果が顕著ではない。でも放置しておけば必ずがんは大きくなって、急速に死の転帰をとってしまう。それならば抗がん剤と代替療法を併用すればいいのか。またどんながんなら抗がん剤で助かるのか、あるいは苦しむだけで死に至るのか。代替療法がどれだけがんを抑える力があるのか。深刻な悩みが次々に湧いてきます。

がんは普通の病気と違って、非常に多くの人々が生命を失うため、どうしようかとみんなが右往左往します。また現代は情報過多の時代で間違った情報も入り乱れているため、いろいろな本を読んだり、ネットを見たりしてあれこれと悩みます」

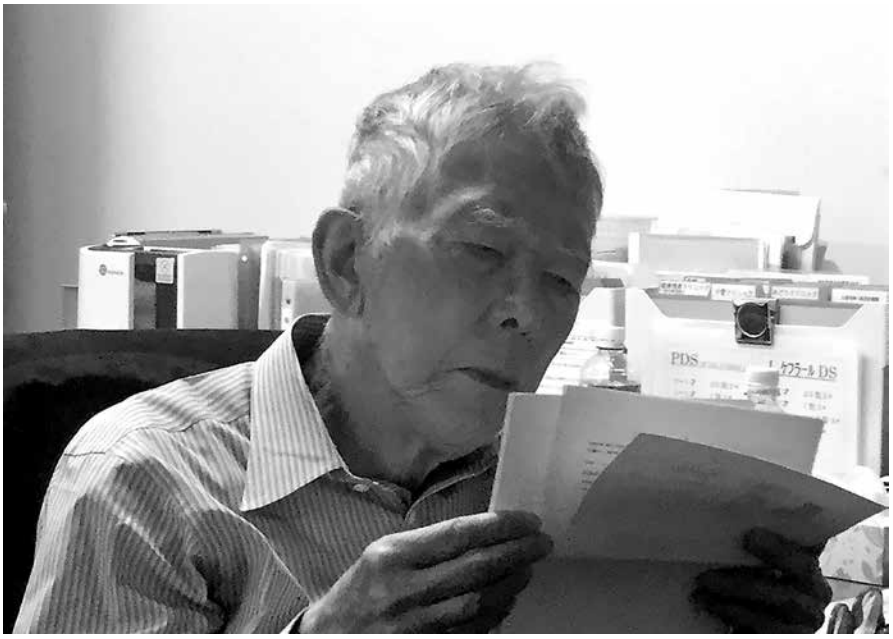
そんながん患者さんたちにこのインタビューが少しでも役に立てば幸いです。

がんで死ぬのではなく抗がん剤治療で死ぬ

――手術からの抗がん剤治療、化学療法ですが、最初はほとんどが検査をした大学病院などの大きな

病院で勧められますよね。しかし、最近は患者さんも抗がん剤治療は副作用があるという認識を持つ方が多いようですね。

「私だけでなく多くの医者が気づき始めたし、海外の先進国では抗がん剤には大した延命効果がないとした論文が大半を占め、抗がん剤をファーストチョイスしない傾向にありますから。抗がん剤はがんも叩きますが、人間の正常な細胞よりもがんのほうが強いから、がんが弱るよりも先に人間のほうが苦しんで死んでしまいます」



――そこでがんを宣告されると悩むことになるといいます。ほとんどの人が抗がん剤など化学療法に代わる治療法が分からない。医学に関して素人なのだから当たり前ですよね。そんな中、最近は、がんは手術をしないほうがいいという話も聞きますが、そのことに関して先生はどう思われますか?

「半分は正しくて、半分は間違いです。というのは、がんの部位や種類、進行度合い、年齢、体力など様々な状況によって判断が違ってくるからです。一概にすべて放置したほうがいいというのは危険です。そんなことをしたら助かる命も助からなくなる」

――例えば、手術で取ったほうがいいがんとはどのような?

丹羽「それは手術で完全に取り切れるがんで、転移していないがんです」

――といっても手術で切り取れるかどうかの判断は、医者でないと分からないのでは?

丹羽「そうです。だから見極めが大事なんです。乳がん、子宮がん、直腸がん、甲状腺がん、前立腺がんなどは発見が早ければ手術で完治する可能性は高いです。だいたい6、7割は大丈夫。取れるのなら取ったほうがいいでしょう」

――以前、前立腺がんは手術しないほうがいいとおっしゃいましたが。

丹羽「そう。できればホルモン剤で肝臓をやられる人がたまにいるんです。そういう人は、手術や放射線治療も視野にいれるということです」

――手術の見極めの中で、よく、メスをいれるとがんが暴れるとか、飛び散るからむやみにメスは入れないほうがいいという話を聞きますが、これは本当でしょうか?

丹羽「間違いですね。飛び散るというのは、メスを入れる前からがんが転移して散っているんです。検査ではそこまで見ぬけなくて、開けたら飛び散ったようにあちこちにあった、というのが正しい。あと、体力が弱っている人や、高齢者の人がメスを入れると、弱った傷口からがんが増えることがあります」

――手術しても取り切れない、取

り切れなかったがんの場合、ほとんど抗がん剤治療などの化学療法を勧められますが、これは絶対に断ったほうがいいんでしょうか。

丹羽「ごく一部に抗がん剤を使ったほうが延命効果のあるものもありますが、それも含め、私はクオリティオブライフ（生活の質）に重点を置きますから、やめたほうがいいと言います。数か月の延命で苦しむより、食べたいものを食べて、苦しまずに逝ったほうがいいでしょ。しかし、たいがいの場合は抗がん剤をやらなければあと3～5年は生きられたのに、抗がん剤のせいで苦しんだ挙句に半年しか生きられないことが多い。がんで死ぬのではなく、抗がん剤治療で死んでしまうんです」

早めに丹羽療法を受ければその後の人生が大きく変わる

――手術したほうがいいのかどうかの見極めは医者に任せるしかないのでしょうか？病院側は是非に関わらず経営的に手術や抗がん剤治療を勧めると言いますが…

「だから私のところに来なさいと言うんです。信頼できる、公正な判断ができる、かつ優秀な医者が近くにいるならいいですが、ほとんどの人はそうじゃない。となると最善のチョイスができるのは私しかいません」

――本当にがんだけでなく病気の治療というのは、ケースバイケースなんですね。素人が素人に勧められたからとか、ネットで調べたら、という理由で判断するのは危険なんですね。先生の診療所に行く場合、診断書や、血液検査の結果、ＣＴなどの画像診断のデータなどを持参すればいいのでしょうか？

「そうです。すべてのデータと処方されている薬やこれまでの病歴など、分かる限り持ってきてください。がんでなくても大丈夫。単に薬の相談というのでもいいんですよ。わからないことがあったら、聞きに来てください」

――先生の診療所にいらっしゃるがんの患者さんは、ステージでいうとどのくらいの方が多いのでしょうか？

「やはり重度の方が多いです。余命宣告されて、病院でできることはもう何もないと言われた方も多いですね。ただ、最近は抗がん剤を使いたくないからと言っていらっしゃる方も増えています」

――ステージ1や2でいらっしゃる方は少ないですか？

「少ないですね。本当はそういう段階で来てほしい。そうすれば人生が大きく変わるはずです。医者は今のがん治療は進歩していると言いますが、人間の身体全体を診ないでがんの部位だけを診るところは何も変わっていません。がん細胞にピンポイントで効く最新医療とうたったものも、免疫細胞療法などというものも、夢の新薬といわれたオプジーボも、どれも後に重篤な副作用が出ているのです。抗がん剤などの化学療法は必ず正常な細胞にダメージを与えてしまうんです。初期のがんを抗がん剤で叩いてがんが消えたとしても、抗がん剤で正常な細胞が弱っているから、数年後に弱った細胞ががん化してしまう。つまり、抗がん剤治療は、がんになりやすい体も作っていることになるんです」

――それでも医者が勧める手術からの抗がん剤治療というセットに巻き込まれる人が圧倒的なのはどうしてでしょうか？

「私のところに来る患者さんは、勉強している、問題意識の高い方が多いのですが、普通は知らないんです。抗がん剤の怖さを知らない」

――先生の生薬はどのようながんの患者さんに処方されるのでしょうか？

「それは全員にです。がんと診断された患者さんには全員、私の開発した生薬を処方します。がんの種類やステージによって種類や量は異なりますが、基本は変わらない。同時にＳＯＤも必ず飲んでもらいます」

――それは診療を受ければ誰でも処方してもらえるのでしょうか？

「もちろん」

次号では先生の開発した（現在も研究開発中）制癌効果のある生薬について詳しくお話しを伺いたいと思います。

BOOK紹介

『医学常識はウソだらけ 実践対策編』

三石巌著（祥伝社刊）

分子栄養学が教える正しい食事と運動

以前、会報１７２号で紹介した三石巌先生の著書『医学常識はウソだらけ』ですが、今回はその続編といわれる実践対策編です。先生は残念ながら１９９７年に95歳で亡くなられていますが、この本は、92歳のときに経済界より刊行された『１９０１年生まれ、九二歳、ボクは現役』という単行本を、今年（２０１８年）タイトルを変えて文庫本として発行されました。

実は、今、この三石先生の著書2冊が密かなベストセラーといってもいいくらい売れているのです。先生は医者ではありません。物理学者で分子生物学という分野を切り開き、現代のアリストテレス（※注１参照）といわれた方です。分子生物学というのは、遺伝子生物学のことだとか。ＤＮＡやヒトゲノムというのもこの学問の範疇。つまり人間の生命のメカニズムの解明から始まった学問。ほんの半世紀前から始まったこの学問のおかげで、人は生まれながらにしてどんな病気になりやすいか予測できる時代になったそうです。それは20世紀後半における科学上最大の成果と言われています。

そんななか先生は、人体を徹底的に考察して真の栄養学を確立したのです。人体のメカニズムを研究して栄養学を考える、というと当たり前のように感じますが、現場の医者は肝心の分子生物学や栄養学など少しも勉強していないというのです。三石先生も

「医者は勉強不足。医者による間違った食事や運動の指導によって病気がかえって深刻な状態になっていることが多い。私の管理栄養学は栄養を重視しているが、それは生命のメカニズム解明の道を拓いた分子生物学を知ったことが出

発点になっている」

と言います。先生自身も重症の糖尿病を抱えていました。還暦の頃に糖尿病の合併症といわれる白内障を患い、医者からは数年で失明すると言われたそうです。ところが分子栄養学によって糖尿病も進行せず、白内障で失明もしませんでした。糖尿病の医学常識であるカロリー制限、甘いものをひかえることなどを一切無視して暮らしたそうです。

「医者の知識が間違っていて、私が正しい知識に基づいた生活を送っているから」

本書はそんな三石先生が生物学的に研究した健康長寿の実体験版になっています。病気をかかえながらも執筆活動、講演会、研究を続け、生涯現役でした。そんな先生が実践した生物学に基づいた本当の健康法を紹介します。

白内障にビタミンＣ加齢で抗酸化力は減少

先生は物理学者です。60歳までは物理学の教授でした。その頃に学生たちと勉強会を作り、そこで科学、哲学、栄養学、文明論、詩歌、大学論、政治論などありとあらゆる本を読んだそうです。このあたりが「万学の祖」と言われるアリストテレスに似ているのかもしれません。

「白内障になって、数年で失明すると言われたとき、とにかくビタミンＣを大量にとることに決めたんです。ボクは栄養学者でも医者でもない。しかし、眼球は卵巣や副腎などとともに特にビタミンＣを高濃度に含む器官だということを知っていたから」

このことに加え、活性酸素がからだの組織を痛めつけ遺伝子までも痛めつける。つまり、がんをはじめとするあらゆる疾患のもとになることを前著でも言っています。

「目には紫外線が入ってくる。紫外線は活性酸素を大量に発生させる。白内障とは水晶体タンパク質の酸化が原因。だから活性酸素を取り除く作用のあるビタミンＣをとったんです。医者はそんなこと教えてくれない。知らないから。手術か化学薬品の処方しかしない。それでは何の解決にもならないんです」

先生は、ビタミンＣだけでなく、あらゆるビタミンが活性酸素を除去する効果があり、それらを活性酸素スカベンジャーと言っています。スカベンジャーとは掃除屋の意味で、

「人間は自前のスカベンジャーをいろいろ持っている。代表的なのがＳＯＤ。あとカタラーゼ（酵素の一種）、グルタチオン（アミノ酸実践対策編の一種）、尿酸、女性ホルモンなどだ。でもこれらのものは年をとると減ってくる。40歳くらいからそれが目立ってくる。そこまで言われてスカベンジャーを積極的にとろうとしない中高年がいたら、その神経をボクは疑うね」

というように、積極的に活性酸素スカベンジャー効果のあるものを摂取し、失明もすることなく、白内障も進行しなかったそうです。また糖尿病もインシュリン投与はしていましたが悪化することなく、合併症もなかったそうです。死後解剖をした医師によると、がんもまったく見当たらなかったとか。

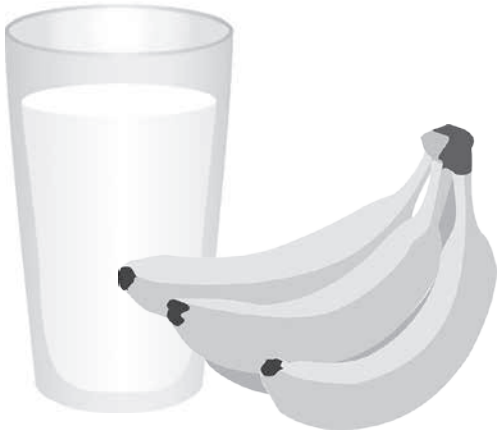
活性酸素と闘う食生活でガンなんか怖くない

では、その活性酸素スカベン

ジャー食品とは具体的に何なのか、先生の食生活から紐解いていきます。

「ボクの食事は、高タンパク、メガビタミン、スカベンジャーの３本立てで、それは朝食から始まる」

そのメニューは、牛乳コップ1杯にバナナ1本、温泉卵一個、配合タンパク（独自に大豆などから作ったプロテイン）の粉末、ビタミンC、B、レシチン、オリゴ糖、ペクチン、核酸、抹茶をミキサーに入れて混ぜたものです。およそコップ2杯くらいになるそうですが、先生はそれを毎朝飲んでいたとか。プラス、ビタミンA、Eのカプセル、イチョウ緑葉エキス顆粒、ミネラルの粒などの補助食品も飲んでいました。先生曰く、牛乳の代わりにカルピスやリンゴジュース、トマトジュースでもいいそうで、要はプロテインをとることが重要だといいます。この朝食で一日のプロテインなどの摂取量の半分以上をとることができるから、あとは比較的普通の食事をとるそうです。



しかし、その中に、絶対にとってはいけないものがあるそうです。

先生は著書の中でたびたび、サイエンスに基づいたと言います。

「科学というやつは理屈なんだ。それもキーワードを使っての理屈なんだ。キーワードなしで科学的であることはできない。ボクは科学的でありたいんだ。浄水器がいい、気功がいい、アロエが効く、水晶がいい、というのはボクには通じないんだ。科学はまやかしを許さない。食べてはいけないものもしかり。毒キノコを食べてはいけないことくらい誰でも知っている。これは知識だ。発がん物質は食べてはいけないというのは、経験による知識ではなく、マスコミからの知識で、学問の教えたことではない。食品添加物、農薬、魚の焦げなどでがんになるといわれるが、普通の量をとったくらいでがんになる確率はゼロに近いものが大部分だということだ。本当の発がん物質というのは、ＤＮＡに傷害を与えることだ。傷害とはＤＮＡ分子から電子を引っこ抜くことだ。これは学問上の知識だから１００年たっても真理として通るんだ。本当に食べてはいけないものは、マーガリンやショートニングなどのＤＮＡを傷つける食品です。ショートニングはパンやケーキ、スナック菓子にも含まれている」

今の医療に病気を予防する力はない

このような食事への科学的な取り組みと同時に、独自の方法で運動というか、先生風に言う〝筋肉を作るフィラメントという繊維の本数を増やすこと〟を毎日やっていたそうです。どんな運動かは本書に詳しく書かれていますが、ストレッチも含めて複数の運動器具を使ったけっこうな運動量のメニューです。毎日続けるというのが大事とか。

先生はがんについて医者に相談したこともなければ、定期検診もがんの早期発見も考えたことがないといいます。もちろん人間ドッ

グとも無縁。

「定期健診を受けるか人間ドッグに入ればいろいろな病気をいち早く見つけることができるかもしれない。しかしそこでもらうクスリは活性酸素の発生源であってスカベンジャーではないのだ。ということは病院では原因は野放しということだ。ボクの方針はあくまでも原因を叩くこと」

先生は今の医療には病気を予防する力はないと断言しています。早期発見できて手術で取り除いても、原因が改善されなければまた再発する。これを予防とは言わないといいます。目的と手段がずれていると。

そういえば丹羽先生も、いまだに毎日欠かさずランニングをしています。ＳＯＤというスカベンジャーも欠かさずとっています。そして化学薬品の副作用に警鐘を鳴らしています。お二人に驚くほどの共通点があり、改めて「医学常識はウソだらけ」と納得してしまいます。

本書は科学的な専門用語も多いのですが、その科学と私たちの日常とをつないでくれるお話しです。科学と三石先生の人生を通して、本当の健康法が見えてきます。スカベンジャーが減少する40歳以降の方にはぜひとも手に取っていただきたい一冊です。

※注1アリストテレス

古代ギリシャの哲学者。プラトンと並び、西洋最大の哲学者で、政治学、医学、天体学、自然学、物理学、生物学、詩学、演劇学など多岐にわたる研究から「万学の祖」といわれている。

◆丹羽先生診察ご希望の方は
御紹介、御予約いたします。
※自由診療となります。
丹羽メディカル研究所
☎０１２０(７３１)１７５
もしくは
日本ＳＯＤ研究会
☎０３(５７８７)３４９８
まで　お電話ください。

ＳＯＤ様作用食品 体験者の声をお聞かせ下さい。

難病で苦しむ方たちが、少しでも早く良い治療法に行き当たるように、本誌では愛飲者の声を募集しています。お手数ですが、

〒158-0094 東京都 世田谷区
玉川１−15−2　Ｂ棟2802
日本SOD研究会　宮城宛
TEL 03－5787－3498
までご一報下さい。

●SOD様作用食品とは●
丹羽博士の開発

ＳＯＤとは、スーパーオキサイド・ディスムターゼの頭文字をとったもので「活性酸素」を取り除く「酵素」のことです。

最近、健康のカギを握る物質として「活性酸素」と「ＳＯＤ」の働きと役割がクローズアップされてきました。そして、活性酸素が体内に増加すると、がんや成人病など、さまざまな疾病を引き起こすことが明らかになってきました。

体内に活性酸素が増えても、本来、人間や動物には余分な活性酸素を取り除くＳＯＤという酵素が存在していて、病気を防ぎ、身体の健康を守ってくれます。ところが、現代社会の弊害（公害、薬害、食品添加物の害）などが、活性酸素を暴走させていて、体内のＳＯＤだけでは追いつかなくなっています。

しかし、残念なことにＳＯＤという酵素は分子量が大きいために内服しても胃で破壊され、腸から吸収されませんでした。それを、内服できるように研究されたのが丹羽ＳＯＤ様作用食品です。

開発した丹羽靭負（耕三）医学博士は、京都大学医学部を卒業し、医学博士として数々の研究が注目を集めていたときにご子息を白血病で亡くされ、それをキッカケにＳＯＤの研究を始めました。副作用がまったくないがん治療薬、がテーマでした。開発には実に二十年もの歳月が必要でした。

「活性酸素をはじめとする免疫学の研究を通して私が知った〝自然の摂理〟は、私に大自然のメカニズムの精微さと人間の自己治癒力の偉大さを教えてくれました。〝病気は自分が治すもの〟私は、この理想を患者さんの誰もが実現できるように医師の立場から最大限の努力を続けています」

先生は今も、土佐清水病院院長として、毎日、医療の現場でがん、アトピー、膠原病などの難病に苦しむ患者さん達の治療にあたっています。また、ＳＯＤなどを始めとする論文は海外でも高い評価を得、日本のみならず海外の学会で講演をしたり、大学病院で特別講演をしたりと、多忙な日々を送っています。

幸いなことに最近、西洋医療と東洋医療などを統合した医療へと世の中の流れが向かっています。代替医療に対する関心や認識も高まり、丹羽博士が40年も前から言っていた、本当の意味での人を診る診療の時代です。

この会報は、そんな丹羽博士の志を受け、誰もが自分の力で健康でいられるように、難病で苦しむ方が少しでもなくなるようにとの願いを込めたものです。

SOD研究会からのお知らせ

いつもSOD研究会報をご覧いただきありがとうございます。
最近、特に当研究会へお問い合わせいただくことが多い内容についてお知らせ致します。
「丹羽耕三博士のSOD様食品は金の笠のシールが貼られていれば、どこも同じものなのでしょうか?」というような、ご質問をよくいただきます。
その回答としましては、金の笠（管理番号付）シールは丹羽免疫研究所で分析・検定し、エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で開発当初から、厳しい品質管理のもとに伝統的な製法で造られる製品だけに貼付される信頼の証（マーク）でした。しかし、ここ数年前より丹羽先生の考えで別の工場で製造されたSOD様食品にも金の笠のシールが貼られ、販売されているものもあります。土佐清水市の工場で製造されたか、そうでないかを見比べる一つの目安が、まず金の笠シールの特徴にあります。

エーパック・ニワ加工工場（土佐清水市）で製造されている製品シールの特徴

原寸大　横 30mm、縦 25mm

- **管理番号は６桁**
  ※土佐清水で製造された証明の通し番号となっています。
- **シール左部分に絵や記号が記載されている**
  ※左部分の表示は製品管理の為、不定期に変わります。
- **他の工場で製造された製品と比べ、原末の味や色、粒の大きさが違う場合などがある**